

【コラム8】 定点インタビュー

辻 喜代司（梅花女子大学・非常勤）

教育学研究科の院生グループの一員として、2007年度から野殿・童仙房地域で住民の方々を対象としたインタビュー調査にかかわってきました。年度ごとの報告集にあるとおり、この間の院生の研究的関心は、歴史・民俗学から社会学にまたがる裾野を形成しながらも、生涯学習をひとつの結節点として、地域で暮らす人びとの生活のありように迫ることに向けられてきました。

そこでの調査者と被調査者の関係は、おのずと旧野殿童仙房小学校を場とした「教育空間」における院生と住民との関係をベースにしたものになります。院生は地域活動の要請に応じて、ファシリテーター（活動促進者）としての役割を果たす場合もあるけれども、畑づくりを初めとして、テント設営や火おこしや地元食材の調理などの生活技術に関しては、住民に教えを請う存在であると言えます。この、場面に応じて教育関係が変化する相互交流的なスペースを、複数年にわたる時間帯で維持しようと思えば、院生は調査活動においても、一度きりのインタビューで自分の聞きたいことだけを質問する、通過的研究者としては成立しません。地域で暮らす人びとの「暗黙知」に触れ、それを尊重する生活空間共有型の研究者としての立場が求められるのです。

同一地域で、このようなスタイルを維持しながら継続されているという意味では、この活動は「定点インタビュー」と呼べるかもしれません。区長を中心として運営される野殿童仙房生涯学習推進委員会のみなさんには、調査のコンタクト・パーソン（相談相手）としてだけでなく、年度ごとに内容の異なる聞き取りに複数回応じてもらっています。そこでの話題は、地域の人びとが集散的に創造してきた歴史や文化、あるいはそれらの記憶に関するものが多いのですが、私自身にはひとつの反省があります。それは、せっかく多くの農業者のみなさんへのインタビューを試みているにもかかわらず、生産活動そのものにアプローチする聞き取りが少ないということです。これは、所与のフィールドにおいて、生産（労働）と教育という観点からの研究を、私が血肉化するのに、予想以上に手間取っていることを示しています。また、この分野での研究の蓄積が少なく、方法論への認識が十分でないという背景と関係しているのかもしれません。

いずれにせよ、私は農業者を「固有の知識体系を持つ労働者」（E.ジェルピ 1983 『生涯教育—抑圧と解放の弁証法』東京創元社）とみなす視点から、その生産活動で日常的に探求が行われているという事実、さらに注目していきたいと思っています。そのような認識の深まりにおいては、知の相互交流という、困難ではあるがチャレンジングな命題をときほぐす手がかりがもたらされる可能性があると考えます。